

## 地図と謎解き

駒澤大学名誉教授 中村和郎

### 冬に南風が吹く地域

今回は、初めから地図好きとはいえなかった私が、地図のとりこになった個人的な経験を書いてみたい。自分から進んで書きたいことではないが、地図嫌いだと思いこんでおられる先生に少しでもヒントになることがあればと考えてみた。

私は学生時代に気候学に関心があった。日本の気候図を見ていて、不思議に思ったことがあった。たとえば、日本各地の冬の卓越風向である。われわれは日本の冬の季節風は北西風だと思っている。しかし、気候図や気候表を見ると、奄美大島以南は北東風である。毎日の天気図で見ても、北西季節風は奄美大島付近で決まって北東風に向きを変える。これはまだしも、富山などの冬の卓越風は北西風ではなくて、むしろ南よりの風であるという事実を初めて知ったときは驚いた。

冬に南よりの風が卓越するのは富山のほかにはどこがあるだろうかと思って調べてみると、北陸地方に意外に多いことがわかる。北西季節風がともに吹きつけると思われる北陸地方の日本海岸で、季節風とは正反対に近い南よりの風が卓越するとなれば、ますます不思議に思われる。

中部地方と近畿地方を中心とする詳細な天気図を作ってみると、冬には高山盆地あたりに小さな高気圧ができてることがある。本州でもいちばん陸地が広いこの地方は冬になると一段と冷却して内陸高気圧ができ、そこから吹き出す風が北陸地方で南よりの風になるというのが一つの答えになるのではあるまいか、などと考えた。

太平洋側に吹き出す風はどうなっているのだろう。

今ならば、インターネットでアメダス観測地点

の毎時間の風向分布を簡単に見ることができるので、興味のある人は、気象庁の電子閲覧室でアメダスを見るとよい。冬の期間の夜間と日中とでは、どちらに南よりの風が多いだろうか。

その当時の私は地図に特別な関心を抱いていたわけではないが、地図を見ていて、教科書や参考書などに書かれていない、上のような疑問がふつとわいてきたといってよい。

### 地図を語り始めた頃

私は帝国書院の『地理資料』（1981年6月号）に「地図を読む話」を書いたことがあった。ウェーゲナーの「大陸移動説」は、大陸が移動したという説を裏づける根拠として、古生代のカタツムリの分布や、ウェーゲナーの義父にあたるケッペンと一緒に、大陸がくっついていたらと仮定すると古生代にも熱帯・乾燥帯・寒帯などの気候帯が当時の緯度に沿って帯状に配列することなどを挙げている。柳田国男の「蝸牛考」では、カタツムリをいい表すおびただし数の方言は、近畿地方を中心としてデテムシ系-マイマイ系-カタツムリ系-ツブリ系-ナメクジ系が同心円状に配列することに注目し、方言というのはなまった、きたない言葉などではなくて、実は京都で生まれた言葉が池の波紋のように広がったものだという方言周囲説を唱えた。このどちらも地図があって初めて生まれた学説だと述べた。

私が大まじめで地図のことを考え始め、それを地理学の講義などで学生たちに語り始めたのはそれより少し前のことであった。

その頃読んだ『洞穴学ことはじめ』、『植物の進化を探る』、『農業の起源』、『生と死の地理学』、『三角縁神獣鏡』（書名失念）などの本は、専門分

野が違っていてもいずれも地図を使って謎を解いていく話が入っていて興味が尽きなかった。

地理というのは地形、気候、人口、都市、農業、環境などという内容から構成されるが、それにとらわれずに地図にこだわって見たらどうだろうか、としだいに考えるようになった。こうして、『地理学講座』（古今書院 1988）の第1巻第1章に「地理学にとって地図はなぜ必要か」を書いた。



## 古地図の謎

函館に行ったときのことであった。最初に市史編纂室で函館の古地図のコピーや函館市の資料などを見せてもらった。

図1はそのなかの一枚の古地図である。コピーのため不鮮明だったせいもあるが、この地図のなかの黒々とした部分は何だろうと気になった。川だろうか？ 川にしては海岸線に平行で、どこまで行っても海に注ぐ河口がない。濠？ それとも虫食いのあと？

疑問を抱いたまま、翌日、たまたま観光案内所に入った。急な木製の階段を上っていくと、二階の真正面の壁に港から函館山を描いた「箱館市海岸図」が掲示されていた。一軒一軒の家

までも克明に描いた巻物のように横長の絵である。切妻屋根の家々は海岸沿いにびっしりと軒を接して並んでいる。海岸線は数段の石垣が組まれるなどして、どこにも自然海岸が見られない。

しかし、何よりも目が釘づけにされたのは、海岸の家並みのすぐ背後に、その屋根の高さよりもはるかに高い、生々しい急な崖が連なっていることであった。そして崖の上にはまた家並みがあり、高い樹木も茂っているのがわかる。段丘地形である。港を見下ろす高台には役所と役人宅などが置かれ、大きな寺も並んでいる。開港して数年後には、欧米人も高台に進出してきて、函館市西部地区の景観の原形が形成された。

函館の有名な坂道が、もともとはこんな急な崖だったと想像できるだろうか。別の古地図で見ると、この崖は高い階段で上り下りしていたものらしい。今でも注意して歩けば、末広町あたりの建物の裏には高い壁が築かれていて、この名残が認められる。

古地図のシミだと思ったものは実は崖を表す地図の記号だったのである（図1の原図を見れば、着色してあるから一目でそれが記号とわかるが）。

古地図を見たときにすぐに質問したら、いとも簡単に回答が得られたに違いないが、こんな風にして自分で謎が解けたときの快感は格別である。これも地図の楽しみを知るきっかけであった。